

平成 23 年度 海外渡航旅費助成金成果報告
北海道大学大学院理学研究院 附属地震火山研究観測センター 山田卓司

平成 23 年度海外渡航旅費（前期）の助成をいただき、オーストラリア・メルボルンで開催された測地学地球物理学国際連合（IUGG）の 2011 年大会に参加させていただきました。IUGG の会期自体は 6 月 28 日から 7 月 7 日でしたが、IASPEI 関連のセッションが 6 月 30 日から 7 月 4 日であったこともあり、私自身は 6 月 29 日から 7 月 5 日までの 7 日間にわたって参加いたしました。大会では、2010 年暮れのオーストラリア北東部での大雨およびそれに伴う洪水や、2010 年 9 月および 2011 年 2 月のニュージーランド・カンタベリー州の地震、2011 年 3 月 11 日に発生した東北地方太平洋沖地震などに関する数多くの講演やポスター発表が行われました。以下の通り、成果報告をさせていただきます。

私は、6 月 30 日に開催されたセッションにてポスター発表を行いました。私の発表セッションは当初 2 つに分かれていたセッションが合併し、「S01/S03 Seismological Observation and Interpretation / Sub-Saharan Africa Seismology」となっていました。参加前は、一見縁遠いセッションが「残り物」的に無理やりくっつけられた印象が払拭できずにいたのですが、逆にポスターを聞きに来てくださった方々のバックグラウンドも多岐に渡っていたようです。そのため、同じ専門分野の研究者との突っ込んだ議論ばかりになってしまいがちな米国地球物理学連合（AGU）の秋季大会とは違い、普段私自身が接する機会の少ない分野の方々からの質問を受け、有意義な議論ができたことが収穫でした。ただ残念だったことは、ポスター発表者に与えられたスペースが縦長 A0 であった上に、隣のポスターと「く」の字型に 90 度の角度で向かい合う形にポスターを展示する格好になっていたことです。このポスターボードの配置のため、片方に聴衆が集まると隣のポスターがほとんど見えないということが多々あり、私自身も自分が興味を持ったポスターの発表者と十分な議論ができなかったことがありました。

IUGG 大会の特徴のひとつは、「Union Plenary Lecture」ではないでしょうか。これは、各分野の専門家があるトピックについて分かりやすく解説をするものです。私が特に興味を持ったのは、B. Kennett 先生と T. Jordan 先生のお話でした。Kennett 先生は、各自の持っているデータから導きだされた「ベストモデル」が、真実であるとは限らないことを常に意識するべきだと、地球の構造を導きだすことを例に挙げて強調されていました。また、Jordan 先生は、「forecast」と「prediction」という言葉を正しく使い分けようというお話をされていました。日本語をあてるのは難しいですが、「forecast（予測）」と「prediction（予知）」でしょうか。地震発生予測など、自然現象を相手にしている場合には完全に

100%あらかじめ言い当てることはほぼ不可能なのであるから、この場合は「forecast」であるが、災害予測などは、input と伝達関数が正しければ正確に災害の規模などを推定できるので、「prediction」であるということを強調されていました。少し話がそれますが、北大でも博物館での展示や、一般向けのサイエンスカフェや講演会などを通じて、研究成果のアウトリーチにつとめています。個人的感想ですが、博物館の展示解説や一般向けの講演などを行うと、地震「予知」はすでに実現可能な段階まで来ていると期待している方々が予想以上に多いように感じます。Jordan 先生の話聞きながら、イタリアのラクイラ地震に関連した研究者の起訴に思いを巡らせつつ、改めてアウトリーチの大切さを思い知らされた気がしました。

私は今回が初めての IUGG 参加だったのですが、人づてに聞いた 4 年前の大会とは違い、非常に実行組織がしっかりした会議だったと感じました。オーストラリア人の気質でしょうか。このたびの会議参加を可能にいただいた本助成に関して、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。